

読解リード図

- 引用
- 補足
- 主張
- 結論
- 1 芸術家の創造と、学者の創造はさほど変わらないと思うようになった。
 - 2 ニーチェは「創造の過程」について、三つの比喩で説明している。
〈すぐれた創造者〉になるための過程
 - 1 **ラクダの段階** = 人類の文化遺産(伝統)を担う忍耐の時代。
・苦しい徒弟時代で伝統を自分のものに出来るが、これだけでは不十分。
 - 2 **ライオンの段階** = 伝統と格闘し、否定する段階。
・伝統の否定は、創造者には必須の段階だが、これだけでも不十分。
 - 3 **赤子(子供)の段階** = 自由な境地に到達する段階。
・ラクダとライオンの時期をのりこえた、無邪気な子供の心になってこそ、真の創造は可能。
 - 3 若い芸術家には、あまりに早くライオンになりたがる人がある。
また、ラクダの重荷から解放されない人もある。
 - 4 **ラクダや、ライオンの段階をへて、子供の段階に到る人は少い** (22)
←しかし
尊敬する学者や、芸術家には皆子供のようなどころがある。
・ノーベル賞学者の湯川秀樹先生は、チンドン屋を面白いといった。
= 「子供の心」 = 「創造者の心」で新しい好奇心をよせている。
 - 5 ニーチェがいう「子供の心」 = 「ものをたえず新しく見る心」 (29)
われわれがものを見るときは、「常識」という眼鏡をかけている。
・三角のものをみて「三角である」というのは「常識」で、
子供の心で見れば、四角と感ずることもある。
 - 6 創造とは、ものを裸の眼で見ることから始まる。
←
子供の眼で、ものを新しく見直すとき、ものの別な姿が見える。
 - 7 新しい眼で見た世界は体系性、完結性をもっている。
その世界の一端から奥へと追究するべきである。
←すると
世界がむこうからあらわになってゆく感じ (= 「創造」の感じ) がする。
 - 8 人はこの世界に我を忘れる。 = 子供の忘我・熱中
 - 9 創造の最終段階の子供はラクダの忍耐と、ライオンの勇気を内面にもつ。そういう子供の樂園としての大学を望む。

読解のポイント

芸術家や学者にとって「真の創造」とは何か、それを目指すには何が必要かを考察した文章である。

伝統は創造には必ず必要なものであることをつかむ。

伝統を否定する段階から、抜けなくてはならないと著者をつかむ。

ラクダは伝統の否定、ライオンは伝統の否定、子供はそれを超えた境地を指す。

POINT 出處が合っている箇所を解説する問題とは、本文中の比喩の表す内容が正しくとらえてから検討しよう。

「子供の心」を阻むもの。

「子供の眼」に見えただけにとどまらず、創造には奥深いところまで追いつく。

解説

読解問題

問一 本文はニーチェの「創造の過程」を表す比喩をもとに、学者や芸術家にとって「真の創造」とは何か、それを目指すには何が必要かを考察した文章である。ニーチェの比喩「ラクダ」「ライオン」「子供」が、それぞれ「創造の過程」においてどのような段階を表すかは、段落図で説明されている。傍線部①の「彼」は「ラクダ」にたとえられている。「ラクダ」の段階は「徒弟時代」であり、「人類が長い間つづいた重い文化遺産」(7) (= 伝統) を担う忍耐の時代であるという。この「伝統」は、創造の過程の初めに学び、その後の時代を支えるものなのでイが正解。ア「変革」、ウ「超える」、エ「至める」、オ「妨げる」はこの「ラクダ」の比喩に合わないので不適。

問三 傍線部②は、「ライオン」の段階についての説明。これは「そのころの二つに伝統の黄金がかがやく竜」(11) (= 伝統) と格闘し、これを否定する段階とある。この段階では、伝統を否定しようとするあまりに、かえってそれ(伝統の否定)にとらわれてしまうことが懸念されるという。これが傍線部の意味するところである。しかし、「まだそれでは駄目」(17) とあるように、真の創造には「否定までのりこえる自由な境地」(17) に立つことが必要だと述べられている。

傍線部の説明としては、「否定的にとらわれる」という表現が、「伝統を否定しようとする」あまりに、かえって「伝統にとらわれる」結果になるという矛盾した状態を表していることをおさえよう。伝統に「縛られる」「束縛される」などとしてもよい。

解答

読解問題

問一 a 過程 b とい c 辛抱
d 尊敬 e 眼鏡

問二 イ

問三 伝統を否定しようとして、かえって伝統に束縛されているということ。(32字)

【単語・訳語】「伝統を否定しようとする」とは、かえって伝統にとらわれることによる。意が書ければ可。／「伝統を否定しようとする」とは、伝統を意図してしまつこと。(35字)／「否定しようとする」とは、逆に伝統そのものを認めたことによること。(32字)

問四 ウ

問五 新しい眼で見た世界は体系性、完結性をもつものであり、その一端だけでなく奥まで追究し、あらわにすることが創造といえるから。(60字)

【単語】「新しい眼で見た世界は体系性、完結性をもつものである」意が書ければ可。／「追究」は新しい眼で見た世界を追究し、あらわにすることが必要である。意が書ければ可。

言葉

ア・エ

語彙力UP!

- (1) 芸術作品を作る「制作」と単にものを作る「製作」。
- (2) 束縛から自由になる「解放」と制限を解く「開放」。「開放」は「戸や窓を開け放つ」も可。
- (3) 物事の本質を直接把握する「直観」と心で感じ取る「直感」。

二百字要約

ニーチェは、創造の過程を、伝統を学ぶラクダの段階、伝統を否定するライオンの段階と無邪気な子供の段階に分け、真の創造は常識にとらわれない子供の段階の自由な境地に到達してはじめて可能であるという。新しい眼で見られた世界も体系性・完結性をもっていて、子供の眼の追究者となって自然に世界が開けてくるのが創造ではないか。大学は、ラクダの忍耐とライオンの勇気を内面にもつたそんな子供の樂園であつてほしい。(40字)

百字要約

芸術家や学者にとって真の創造とは、伝統を学ぶ段階、伝統を否定する段階をへた自由な境地に到り、子供のようないくつでも自分の向かう世界を追究することだから、大学はそんな子供の樂園であつてほしい。(98字)

要約解説

本文は、ニーチェの言葉の引用と、それを補足説明した前半部と、創造について筆者が自己の主張を展開する後半部とに分けることができる。前半は、創造の三つの段階と〈子供の段階＝自由な境地〉であることの補足説明(→A)をまとめる。後半は、子供の眼で世界を追究することによって体系性をもつた世界がむこうから自然に開けてくるのが創造である、という筆者の主張(→B)をまとめる。最後に、そのような子供の樂園としての大学のあり方を結論として述べている点(→C)も忘れないようにしよう。